

プログラム

13:30 開始

13:35 - 15:05 コレクティブのトーク

15:05 - 15:10 休憩

15:10 - 15:30 質疑応答

司会進行

羽鳥悠樹 (福岡県文化振興課学芸員)



参加方法

Zoomによる視聴(要事前申し込み)

※定員:各回50名 ※途中の回からの参加、特定の回のみでの参加も可

九州芸文館ホームページ「申し込みフォーム」よりご応募ください。

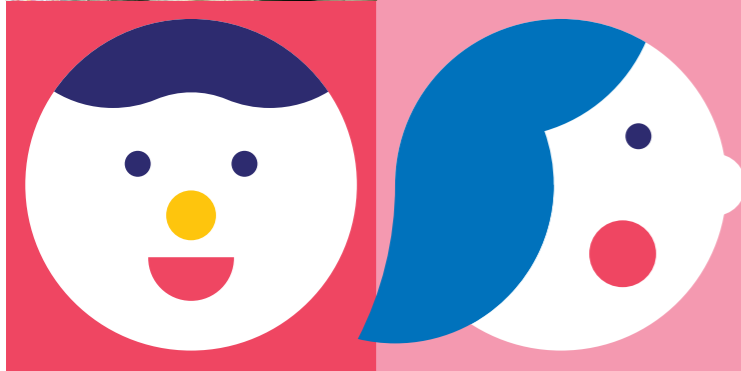
<http://www.kyushu-geibun.jp/main/5285.html>

※ご視聴にはパソコンやスマートフォンをインターネットに接続できる環境が必要です。
※当日ご覧頂けなかった方、もう一度ご覧になりたい方は、後日、アーカイブされた動画の視聴も可能です。



**collective
ch!ggo**
コレクティブ ちっこ

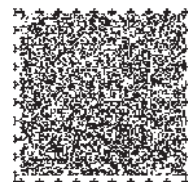
本企画では、九州芸文館を会場にオフラインで行うプロジェクト「コレクティブちっこ」も開催します。「コレクティブちっこ」の活動メンバーも募集していますので、九州芸文館ホームページで詳細をご覧ください。



写真提供: 1, 6 Jatiwangi art Factory, 2 Katakera, 3 SIKU Ruang Terpadu, 4, 5 Lakoat Kujawas

九州芸文館 (筑後広域公園芸術文化交流施設)

〒833-0015 福岡県筑後市大字津島1131 TEL 0942-52-6435
<http://www.kyushu-geibun.jp>



Uni-Voice

このマークは、目が不自由な人などが使う音声コードです。

オンライン開催(Zoomを使用) / 参加費無料 / 要事前申し込み / 日本語・インドネシア語通訳あり

※定員:各回50名
※途中の回からの参加、特定の回のみでの参加も可



開催日時

2021年

5月8日(土)、16日(日)、30日(日)

6月6日(日)、13日(日)、27日(日)

7月3日(土)、11日(日)、25日(日)

13:30~15:30

(全9回)

今や非日常になってしまった、人が「集まる」ということを主要なテーマとし、専門家とインドネシアの8組のコレクティブによる連続トークなどを通して、コロナ禍における人々の交流とアートの可能性を探ります。

コレクティブと考える

パンデミック以降の地域文化活動の可能性

主催:九州芸文館美術展実行委員会
企画:羽鳥悠樹(福岡県文化振興課学芸員) アドバイザー:中村美亜(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)
写真提供:上段・中段左・下段右 Lakoat Kujawas、中段右 Jatiwangi art Factory、下段左 Gudskul

九州芸文館
KYUSHU GEIBUN-KAN

コレクティヴと考える

パンデミック以降の **地域文化活動** の可能性

2019年末から爆発的な広がりを見せた新型コロナウイルス(COVID-19)によって、世界は瞬間に変化してしまいました。移動や外出が制限され、人が人と会うという日常的な行為は、今や安心してできることではありません。

このパンデミックは、近年、交流や関係性を創出させる取り組みが多く見られる現代美術においても、作家の活動に大きな影響、そして制約を与えています。また、多くの国際展覧会も中止になり、博物館や美術館もその活動の制限を余儀なくされています。この状況下で、これまで、オリジナルであることや、直接的な体験がその価値を担保してきた美術には、何ができるのでしょうか。

2019年、インドネシアのアート・コレクティヴであるルアンルパ(ruangrupa)がドクメンタ15の芸術監督となったことに象徴されるよ

うに、近年、美術界ではアート・コレクティヴの活動が大きな注目を集めています。人々が集まり、アイデアを共有し、時には美術の領域をはみ出して協働することによって、交流や関係性を生み出し、可視化してきたコレクティヴたち。「集まる」ことを活動の核としてきた彼らは、コロナ禍におけるこれからの人と人との交流をどのように捉えているのか。地域のコミュニティはどのように創造、維持されていくのか。国を越えた移動もままならないこの状況で、国際的な交流はどのように可能になるのか。

本企画では、こうした問題意識の下、今や非日常になってしまった、人が「集まる」ということを主要なテーマとし、専門家とインドネシアの8組のコレクティヴによる連続トーク、そしてオフラインで進行する井戸端会議企画「コレクティヴちっこ」を通して、コロナ禍における人々の交流とアートの可能性を探ります。

第4回 6月6日(日)

Katakerja

カタクルジャ

スラウェシ島、南スラウェシ州の州都マカッサルで活動するコレクティヴ。彼らは図書館としての機能をベースとした活動を行っています。公的な図書館のあり方に不満を持った彼らは、自分たちで理想の図書館を作ってしまうと考え、カタクルジャの設立に至りました。本を媒介につなぎ、発展する彼らのコミュニティは、今どのような課題に直面しているのでしょうか。



第7回 7月3日(土)

Komunitas Gubuk Kopi

コムニタス・グブアック・コピ

スマトラ島、西スマトラ州のソロックで活動するコレクティヴ。彼らは、芸術とメディアという観点から、ソロックの歴史や記憶、物語を通して、住民とともに地域について考えるプロジェクトを手掛けています。未曾有の世界的混乱は、ソロックにどのような変化をもたらし、彼らはそれに対しどのように立ち向かっているのか、その現状を共有してもらいます。



第1回 5月8日(土)

ガイダンス

講師：廣田緑

国際ファッション専門職大学准教授

インドネシアで17年間アーティストとして活動を続け、現地のアートを取り巻く状況をその内側から見てきた廣田緑氏を迎え、コレクティヴという、まだ一般にはあまり馴染みのない概念についてレクチャーをして頂きます。



第2回 5月16日(日)

Kunci Study Forum & Collective

クンチ・スタディー・フォーラム & コレクティヴ

古都ジョグジャカルタで、研究や教育活動をメインに行うコレクティヴ。ジョグジャカルタは比較的小さな街ですが、その中に多くのコレクティヴやギャラリー、アトリエがひしめき合い、独自のアート・ワールドを形成しています。そこではどんな課題があり、どんな活動が行われているのでしょうか。



第3回 5月30日(日)

Kwangsan Kunstkring

クワンサン・クンストクリング

東ジャワ州のスラバヤで活動するコレクティヴ。芸術と社会という観点から、領域横断的な知識の共有を促すようなプロジェクトを積極的に展開しています。都市や社会の問題に関して、レジデンスや遠足、展覧会、討論会、出版など、様々な方法でアプローチを試みています。今回は2人のメンバーに、これまで、そしてこのパンデミック下における彼らの活動や、スラバヤのアート・シーンの状況について語ってもらいます。

Kwangsan * Kunstkring



第5回 6月13日(日)

SIKU Ruang Terpadu

シク・ルアン・トゥルパドゥ

マカッサルで活動する、複合コレクティヴ。4つのコレクティヴが集まり、一つの大きなコレクティヴを形成しています。自分たちの存在や活動を「オーガニックなもの」と呼ぶ彼らは、何事も人と集まっておしゃべりをしていくなかで決まってくると言います。その緩やかな有機的つながりは、コロナ禍においてどのように維持することができるのでしょうか。



第6回 6月27日(日)

Gudskul

グッドスクル

ジャカルタで活動するルアンルパ(ruangrupa)、セルム(Serrum)、グラフィス・フル・ハラ(Grafis Huru Hara)が共同で運営している、教育機関を備えた複合コレクティヴ。パンデミック発生当初から、フェイスシールドの制作・寄付など、アートの枠を超えて、彼らの持つ技術をいち早く社会と共有してきました。今回は合計3人のメンバーに、複数の視点からコロナ禍におけるコレクティヴの活動について語ってもらいます。



第8回 7月11日(日)

Lakoat Kujawas

ラコアット・クジャワス

東ヌサ・トゥンガラ州、ティモール島のモロで活動するコレクティヴ。インドネシアのアート・シーンは、ジャカルタやバンドン、ジョグジャカルタといった、ジャワ島での活動ばかりが目立ってきました。しかし近年、東ヌサ・トゥンガラ州からは、多くのアーティストが輩出されているといいます。「中心」と「周縁」という関係も含め、都市とは異なる環境で、今何が求められているのかについて、語ってもらいます。



最終回 7月25日(日)

Jatiwangi art Factory

ジャティワンギ・アート・ファクトリー

長きに渡るインドネシアの旅も、ひとまずここで最終回。最後はジャワ島、西ジャワ州のジャティワンギ。そこは、村全体がアートで成立している稀有な場所。彼らは地域の主産業である瓦を活かし、瓦の音楽祭や、職人さんたちのボディビル大会の開催など、ユニークな試みで地域コミュニティの連帯を生み出しています。発足から16年、彼らの活動によってジャティワンギはどのように変化してきたのでしょうか。

